サイボーグ軍人

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
サイボーグ軍人

【Ｎコード】
Ｎ５５３１Ｌ

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
祖国の為に戦うサイボーグに改造されたドイツ軍人ジークフリート＝ハルトマン。祖国の戦いの中を生きるうちに戦争とは何かを知った彼が戦後に辿った道は。昔の漫画でよくあった設定やワールドヒーローズのブロッケンというキャラをモデルにしました。

第一章

サイボーグ軍人

ナチス＝ドイツがどういった国家なのか。この時はよく知られていなかった。

そうしたことがわかる、いやわかったような気になれるのは後世になってからであろう。その時代に生きていた人間には中々わからないものである。

所謂ゲルマン民族至上主義や国家社会主義といったものへの全否定も後世になってからである。日本の今現在はしたり顔でナチスを批判しそれと同列に日本を批判している某巨大マスコミもその当時はナチスべったりでありユダヤ人をナチスに引き渡すべしと主張していたりしていた。

そのナチス＝ドイツであるがだ。曲がりなくも科学技術においては世界の最先端をいっていた。それと共にオカルトの研究も進めていたりする。様々な分野にかなり意欲的に進出して功績をあげていたこともまた事実だったのだ。

その国家の首脳達がだ。今何かを話していた。それはだ。

「では究極の軍人を造るにはだ」

「はい」

「それしかありません」

密室の中で話されている。

「やはりです。それしかありません」

「それしかないか」

「はい、まずはです」

「それしかありません」

「しかし」

ここでまた話されるのだった。

「その候補者ですが」

「それが問題です」
「それも考えるべきです」
こう話されてであった。彼等はそのまま話していってだ。一人がある名前を出した。
「そうだ、ジークフリート＝ハルトマン少佐ならどうか」
「ハルトマン少佐ですか」
「陸軍のですね」
「士官学校を首席で卒業し」
まずは学校の成績が挙げられる。一応参考にはなるがそれだけで能力の有無が決められるものではないというのは話している者達もわかっているようだった。
「フェシング、乗馬、射撃、ボクシングにおいて傑出した成績を残している」
「そして軍務においては」
「凄いな。激務を何ともしない」
「しかも失敗は何一つとしてない」
「あらゆる仕事を時間通りにこなす」
それも完璧だというのだ。
「参謀本部においてもその深謀は定評がある」
「しかも統率力も見られ部下からの人望も篤い」
「祖国への忠誠心も絶対」
「それならば」
ここまで話してであった。遂に太鼓判が押されるのだった。
トップと思われる人間がだ。言うのだった。
「よし、決まりだ」
「彼ですね」
「ハルトマン少佐にするのですね」
「そうだ、彼だ」
また告げられるのだった。
「彼にする。いいか」

「では本人に伝えましょう、このことを」
「それからですね」
「そうだ、それからだ」
こう前置きしたのだった。そしてであった。
ハルトマンに会談の一部始終が話された。
ドイツ陸軍のそのジャーマングレーの端整な軍服と漆黒のブーツに身を包んだ長身の男だ。身体は引き締まりまさに戦う者の身体をしている。見事な金髪を後ろに撫で付け青い目の光は強い。精悍で彫の深い顔をしている。鼻が高くまさにそれはゲルマン民族の顔であった。年齢は三十になるかならないかというところであろうか。
彼はその話を受けてだ。こう答えた。
「わかりました」
「いいというのか」
「祖国の為に」
強い言葉での返答だった。テノールだがほぼバリトンの響きを持っている言葉だった。その言葉で言うのだった。
「喜んで」
「そう言ってくれるか。それではだ」
「宜しく頼む」
「はい」
その男ジークフリート＝ハルトマン少佐はこうして完璧な軍人となることを命じられたのだった。その後暫くして彼はベルリンのある研究室にいた。
そこで白衣の男達を前にしてだ。こう言うのだった。
「では遠慮なくやってくれ」
「遠慮なくですか」
「宜しいのですね」
「既に決まったことだ」
彼の方が落ち着いていた。そんな声だった。

第二章

「だからだ」
「それではいいのですね」
「それで」
「そうだ、すぐに頼む」
こうも言う彼だった。
「それではだ」
「はい、では」
「はじめさせてもらいます」
こうして彼はある部屋にその白衣の男達と共にいった。それから一月後だ。軍務に復帰した彼は外見はこれまで通りだった。しかしである。
何かが違っていた。雰囲気からしてだ。しかしどう変わったかはわからなかった。その彼が軍務に復帰して暫くしてだ。戦争がはじまったのだ。
ポーランドとの戦争だ。それがはじまったのである。ドイツは所謂電撃作戦によって瞬く間にポーランドを蹂躙していった。彼もそれに参戦していたのだ。
だが彼はそれまで務めていた参謀ではなかった。
前線指揮官として参戦してだった。前線で自ら戦っていた。
前からポーランド軍の戦車が来る。ポーランド軍も僅かだが戦車を持っていたのだ。
ハルトマンの方に来る。周りが咄嗟に叫ぶ。
「少佐！大変です！」
「退いて下さい！」
「今そちらに戦車が！」
「大丈夫だ」
しかしだった。ここで彼が部下達に対して言うのだった。

そしてだ。己の左手を右手首に添えてだ。そうしてだ。
「ファイエル」
こう落ち着いた声で言って何とだ。その右手首を離した。
そこからミサイルが放たれる。それは誘導式で敵の戦車に向かってだ。一撃で戦車の重厚な装甲を完全に撃ち抜いてしまった。
撃ち抜かれた敵の戦車は動きを止めた。そしてその直後に炎に包まれてだ。爆発してしまったのだった。ここまでまさに一瞬だった。
それを見てだ。ドイツ軍の将兵達は唖然となった。
「な、何だ？」
「今のは何だ？」
「一体」
「私の身体に備わっているものだ」
こう言ってみせるのである。
「我が愛する祖国が私に授けてくれたものだ」
「ドイツがですか」
「少佐に」
「ドイツは勝つ」
彼は言った。
「私にこの力を授けてくれたこの技術によってだ」
言いながらまたミサイルを放つ。そのうえで戦車を再び粉砕するのだった。
次の日にはだ。空から敵機が二機来た。それに対してだ。
一旦飛んだ。それからだ。
何と両手を前にしてそのまま飛びはじめた。そしてその体当たりで敵機を真っ二つにした。
それで一機倒してだ。もう一機の上に来てそこから足のところからあのミサイルを今度は爆弾として落としてだ。敵機を上から粉砕したのである。
この日は空の敵を退けた。何と彼は空も飛べたのだ。
「凄いですね」

「まさか空を飛べるなんて」
「それもまたですか」
「そうだ、私に備わっている力だ」
それだというのである。
「そしてだ」
「はい、そしてですね」
「他にも」
「それはおいおいわかる」
あえて今は言わないのだった。だが彼の活躍により彼がいる部隊は見事な武勲を挙げた。そうしてその次の日もそれは同じであった。
足からもミサイルを出し指からは高圧電流を放つ。空からの爆弾には螺旋状のビームを放ちそれで爆発させる。手足が伸びてそれで敵兵を接近戦でも倒す。指は手裏剣にもなれば伸びた腕の指からも高圧電流が放たれる。目からは冷凍ビームだった。
そのうえだ。敵兵が接近してきてもだ。
「甘い」
即座に敵兵の懐に飛び込んで鉄拳を無数に叩き込む。それで粉砕し敵の兵士達が動きを止めると左手首を外してだ。そこからはマシンガンを放って敵兵を撃つのだ。
彼はまさに無敵だった。ポーランドとの戦争は一月で終わった。ドイツ軍が戦車や装甲車、それに航空機を駆使した電撃戦で収めた勝利だった。
そしてその中にハルトマンもいた。彼もまた見事な武勲を挙げたのである。
その強さは圧倒的だった。彼一人で千人の部隊を倒したこともある。当然ながらこのことは政府の首脳部にも伝わったのである。

第三章

それでだ。その彼等もハルトマンについて話すのだった。
「見事ですな」
「確かに」
「まさかこれ程までとは」
「我が国の科学技術には絶対の自信がありましたが」
「予想以上です」
彼等はそれぞれの口で話す。密室、しかも暗い中で話しているので顔はよくわからない。だがここにいるのがナチス＝ドイツの中でも国を動かすだけの者達であることは明らかだった。その彼等が話しているのである。
「ではこのサイボーグ技術を軌道に乗せ」
「第二第三の彼を造り上げますか」
「そうしますか」
「そうですな」
ここで一人が言うのだった。
「これだけの戦闘力があるのなら」
「確かにコストと人的資源の確保が難しいです」
「しかしそれでもです」
「これだけの力があれば」
それならばというのである。
「是非ですね」
「総統にもお話しておきましょう」
「はい、我がドイツの生存圏を築き上げる為に」
「その為に」
こんな話があった。しかしであった。
このサイボーグ化した軍人は結局彼しか行われなかった。彼一人だった。

ハルトマンはこのことに対していぶかしみながら軍の首脳部に問うた。何故自分以外にもサイボーグ化を進めないのかと。こう問うたのである。
それに対してだ。その軍の首脳はこう言うのだった。
「人が見つかりにくいのだ」
「人がですか」
「まだコストは何とかなる」
それはだというのだ。
「それはな。色々と手は尽くせる」
「しかし人はですか」
「そうだ、それがいない」
その問題だというのである。政府の高官達の予想はここでは外れてしまったのである。それはハルトマンにとっては残念なことだった。
それを聞いてもだ。彼がこう言ったのが何よりの証拠だった。
「しかし」
「しかしか」
「私以外にも人材はいる筈です」
こう主張するのだった。
「他にも」
「そう思うのだな」
「違いますか」
「中佐、残念だが」
ポーランド戦での功績によってだ。彼は中佐となっていたのである。その功績が認められてだ。そのうえでの昇進だったのである。
「君と同じだけの人材でなければ駄目なのだ」
「私だけのですか」
「そうだ、そうでなければその力は出せない」
そうだというのである。
「だからだ。いないのだ」

「まさか。そんなことが」
「今必死に探している」
それはしているというのである。
「しかしだ。それでもだ」
「いませんか」
「いればすぐに確保して改造手術を行う」
そうすると実際に言うのだった。
「我が国への絶対の忠誠心があればな」
「絶対のですか」
「君が若し敵になったらだ」
その危険も考慮していたのである。
「その時は恐ろしいことになるからだ」
「だからですか」
「我々も欲しいのだ」
その高官、将軍の座にある者の言葉だ。溜息と共の言葉だった。
「それだけの人材がだ。しかしだ」
「いませんか」
「いたら私に教えてくれ」
こうまで言う程だった。

第四章

「是非な」
「左様ですか」
「いないのだ」
そして今度は率直に述べたのだった。
「一人もな」
「本当にですか」
「結果として君には一人で頑張ってもらう」」
「サイボーグとしてはですか」
「我が国は勝ち続けなければならない」
戦争に関する話も為された。
「絶対にな」
「はい、だからこそですね」
「頑張ってくれ。次の戦いでもだ」
「はい」
ナチスのあの敬礼で応える。そうして次の戦いでも彼は進撃するドイツ軍の先頭に立ち多くの敵を倒していった。ドイツは勝ち進んでいき遂にだ。英国にまで迫ろうとしていた。
フランスの海岸にドイツ空軍が集結している。彼等はそれぞれの空港から連日連夜ロンドン上空に向かう。戦いは押しているように見えた。
彼もその中にいた。空を飛びながら空の敵機を倒していく。体当たりや指から出す機銃掃射、それに爆弾でだ。彼は英国の空でも武勲を挙げ続けていた。
しかしその中でもだ。彼の顔は晴れない。そしてこう上官に言うのだった。
「航続距離が足りません」
「足がか」

「そうです、それがありません」
こう報告していた。
「航空機、とりわけ戦闘機の航続距離がです」
「メッサーシュミットでは無理か」
「あまりにも航続距離が短いです」
このことを告げる。
「まともにロンドン上空にいられません」
「それは１０９だな」
「はい」
「１１０はどうだ」
メッサーシュミット１０９はエンジンが一つだ。それに対して１１０はエンジンが二つだ。同じ戦闘機であってもシルエットも性能も全く違っているのである。
「そちらは」
「話になりません」
ハルトマンの報告は軍人らしく率直でかつ真実であった。
「全くです」
「話にならないか」
「イギリス軍のスピットファイアはいい戦闘機です」
「１１０では無理か」
「爆撃機の護衛ですね」
１１０の用途はこれまでこれが主だった。当然この戦いでもそうだった。しかしハルトマンはこのことに対しても言うのであった。
「無理です。スピットファイアの相手になっていません」
「そうなのか」
「スピットファイアやハリケーン、タイフーンには１０９です」
それだというのだ。
「しかし。その１０９もです」
「そうなのか」
「このままでは勝てません」

そしてこのことも言った。
「ですからここは何としても」
「だが航続距離の問題はだ」
「どうにもならないですか」
「ゲーリングを説得するしかない」
ドイツの航空相でありナチスのナンバーツーでもある。ドイツ空軍のトップでもある。軍の階級は国家元帥である。ドイツの空は彼のものだった。
「しかしそれでもだ」
「間に合いませんか」
「今はこのまま攻めていくしかない」
「それではです」
ハルトマンはここでだ。意を決して言うのであった。
「私がです」
「貴官がか」
「ロンドンに潜伏します」
こう申し出るのだった。

第五章

「そしてです」
「そしてか」
「チャーチルを暗殺します」
それをするというのである。
「そうすれば戦局はかなり変わる筈です」
「ロンドンに降り立ちそうしてか」
「それは駄目でしょうか。私のこの技術ならばです」
「それもだ」
しかしであった。上官である将軍はだ。顔を曇らせてきた。そのうえで言葉も濁してだ。ハルトマンのその提案に対して言うのであった。
「駄目だ」
「それは何故ですか？私ならば」
「ゲーリングが言っている。全て自分でやるとな」
また彼の名前が出されるのだった。ゲーリングのだ。
「そう言っているからだ」
「しかしそれでは」
「駄目なのだ。ゲーリングの言葉は大きい」
話が軍事から逸れてしまっていた。明らかに。
「我々がそれを覆すことはだ」
「できないというのですか」
「したいが難しい」
将軍はまた言った。
「非常にな」
「ではこの戦いは」
「勝てないというのか」
「負けます」

率直に過ぎた。この場合はまさにそうした言葉だった。しかし彼はそれをあえて言ったのである。あまりにも率直な言葉であった。
「イギリスに対して」
「そう言うのだな」
「はい、敗れます」
彼はまた言った。
「このままでは」
「しかしこのままいくしかないのだ」
「では本当にそうなりますが」
「政治だ」
将軍は溜息と共に述べた。
「政治の話になる」
「では戦争とは」
「戦争は政治だ」
将軍はハルトマンにこうも告げた。
「軍人が行うものだが決めるのは政治家だ」
「しかしそれでは」
「敗れるというのだな」
「いえ、それは」
「隠さずともいい」
それはもう言うまでもないことだった。既にだ。
「それは次第に気付かれていることだ」
「左様ですか」
「ゲーリングは駄目だ」
将軍はまた言った。今度はそのゲーリングについてだ。
「あの男は確かに軍の階級は持っていて元軍人でもあった」
「はい」
第一次世界大戦の時はエースパイロットだった。レッド＝バロンと呼ばれたリヒトホーフェンの次の撃墜王だった。そのことでも有名だったのだ。

「しかし今はだ」
「政治家ですか」
「政治力はあるかも知れないがあまりにも政治に走り過ぎている」
こう言って批判するのだった。
「そういう男だ」
「では。そういう男が指揮を執るとなると」
「敗れることも必定だ」
苦々しい顔での言葉だった。
「それもまた、だ」
「必定ですか」
「戦争は確かに政治の下で行われる」
戦争は政治的解決の一手段である。クラウセヴィッツは彼等のバイブルの一つであった。
「しかしだ。政治家がその戦争を政治を優先させて考えるならばだ」
「敗れます」
「戦争は戦場で行われる」
「その通りです」
「戦場を理解しないで政治を優先させてはそれで終わりだ」
「だからこそ」
答えはそう出ていっていく。そうしてである。
結論がだ。出されるのであった。

第六章

「敗北ですね」
「その通りだ。この戦いはな」
ここでは英国での空での戦いのことだけだった。しかしこのことはそれで終わりではなかった。ドイツ軍はヒトラーに率いられていた。その彼もまた政治を優先させていた。
ハルトマンはレニングラードの前にいた。凍て付く中にその西欧風の美しい街が見える。だがドイツ軍はそこに突入できないでいた。
その軍の中にハルトマンもいる。彼はその街を見ながら言うのであった。
「このまま突入すればだ」
「陥落させられます」
「今の我等なら」
「そうだ、できる」
彼は確信していた。今街はドイツ軍により包囲されていたのだ。
それを見てだ。彼はまた言うのであった。
「今だというのにだ」
「大佐、何故でしょうか」
「何故突撃されないのでしょうか」
「それはわからない」
ハルトマンは表情は変わらない。だが苦い声であった。
「しかしだ」
「命令は出されていませんか」
「まだ」
「そうだ、出されていない」
軍人として絶対のものがだ。出されていないというのである。
「全くだ」
「では。このままですか」

「包囲したままだというのですか」
「あの街を」
「まだだ」
苦い声のままでの言葉だった。
「待っているのだ、命令を」
「はい、わかりました」
「それでは」
「勝機を逸するか」
ハルトマンは苦い言葉をだ。今は自分だけに出すのであった。
「そうなるか」
「中央軍集団はモスクワに向かっています」
「今報告が入りました」
「そうか」
後ろから部下達の言葉を聞いていた。今戦っているソ連のその首都だ。首都を陥落させることこそがその戦略的目標なのだった。
「間も無く陥落させられます」
「きっとです」
「そうだな」72
部下達の言葉に頷きはする。しかしだった。
「だが」
「だが、ですか」
「この街でもだ」
目の前にはソ連軍がいる。幾重にも塹壕や機関銃に迫撃砲、そして建物を使ってだ。防衛ラインを敷いて彼等の前にいるのである。
「この有様だ。モスクワでもだ」
「こうした有様ですか」
「やはり」
「突破できればいいがな」
そしてであった。こうも言うのであった。
「そしてだ」

「そして」
「まだ何かありますか」
「雪だ」
話に出したのはこれだった。雪だった。
「雪が降る前にだ。ケリをつけないといけない」
「冬が来る前に」
「それよりも前にモスクワを」
「ナポレオンも敗れたあの冬が来る前にモスクワを陥落させなければならない。そしてこのレニングラードもだ。何としても陥落させなければならない」
「ですが今は」
「命令が」
「軍人は命令がなければどうしようもない」
ハルトマンは歯噛みしていた。その機械の口でだ。
機械といえどその構造は人のものと全く同じにされている。ただ強くなっているだけなのだ。それだけで本当に口の中も人のものと全く同じようになっていたのである。舌もあれば歯もあるのだ。

第七章

その口でだ。彼は言うのだった。
「全くな」
「はい、その通りです」
「それは」
「軍人は与えられた命令をしていく」
彼の言葉は続く。
「それだけだ」
「では我々は今は」
「こうしてですね」
「そうだ、戦う」
言いながらだ。右手首を外してそこからミサイルを放つ。ビルを一個吹き飛ばした。だがそれだけであった。
戦いは続いた。結局モスクワは陥落させられずにだ。戦局は泥沼化していき挙句にはである。気づいてみれば首都ベルリンは包囲され。そして陥落してしまった。
その陥落し廃墟と瓦礫の山になった街にだ。ハルトマンはいた。ベルリンは至る場所に屍が転がり黒焦げになった建物が無惨な姿を晒していた。
そして道にあるのは破壊された欠片ばかりであった。そしてソ連軍の将兵達が勝ち誇った声をあげドイツ人達は死んだ目で彷徨っていた。
その中でだ。彼は言うのであった。
「これが結末か」
「中将、生きていたのか」
そこにだ。上級大将の階級を付けた男が来た。そのうえで彼に声をかけてきた。
「西部戦線で戦っていたと聞いたが」

「はい、生きています」
ハルトマンは彼に顔を向けて言葉を返した。
「何とか」
「そうか、何とかか」
「あくまで何とかです」
無念な声での言葉だった。
「しかし。ドイツは」
「そうだな。最早な」
「ベルリンに戻ってみたのですが。この有様ですか」
「ドイツはもう終わりだ」
その上級大将、即ち彼はこうハルトマンに言うのだった。
「ベルリンは赤軍のものになった。それで御覧の有様だ」
「総統は自殺されたそうですね」
「おそらくな」
こう返す将軍だった。
「そう聞いている」
「そうですか」
「そして政府は降伏した。海軍のゲーニッツ元帥が総統としてな」
「ゲーニッツ海軍元帥が！？」
その名を聞いてだ。ハルトマンもいぶかしむ声になった。彼が総統になったということがハルトマンにとってはあまりにも意外なことだったのである。
「あの方がですか」
「意外か」
「意外です」
実際にそうだと述べた。
「あの方は党とは関係なかった筈ですが」
「そういう意味では君と同じだな」
「そうです。純粋な軍人だった筈です」
「しかし総統は最後の最後に元帥を選ばれた」

将軍はあえて事務的にハルトマンに答えた。
「ゲーニッツ海軍元帥をな」
「そして今に至りますか」
「そうだ、降伏しドイツは終わった」
「そうですか」
「我々の身柄も間も無く拘束されるだろう」
将軍はハルトマンにこうも述べた。
「連合軍は我等を徹底的に裁くつもりらしいな」
「勝者が敗者を裁きますか」
「絶対の正義になる為だ」
その為だともいうのだった。
「その為にな」
「我々は罪人になりますか」
「我々にはもう何も言えん。敗れたのだからな」
「敗れたからこそ」
「今は何も言えない。それは諦めることだ」
「わかりました」
ハルトマンも感情を込めずに述べた。彼にしても認めるしかない、そして受け入れるしかない現実だったからだ。現実は避けられないものである。

第八章

「それでは」
「どうなるかな。ただ君は」
「私は」
「確か自然修復能力もあったな」
　将軍はハルトマンの身体についても言及した。
「そしてエネルギーはだ」
「実は錬金術も使われていまして」
「それもか」
「終戦間際の再改造でそれも入れられました」
　そうだったというのである。
「そして今の私はです」
「錬金術もじゃな」
「そうです」
　ナチスではオカルトもかなり深く研究されていた。それで彼にもそれが入れられていたのである。それが今の彼なのである。
「錬金術も考えようによっては科学ということで」
「それでか」
「それで今の私はほぼ永久に動くこともできます」
　それもだというのである。
「ですから」
「しかしそれは誰も知らんな」
「おそらく。私が黙っている限り私がサイボーグだということも」
「ならいい。君のことが知られれば君は必ず不幸になる」
　彼の身体のことはドイツ軍では知られてはいた。実際に見た者も多い。だが多くの偽名に仮の階級、そしてサングラス等も使った変装等により彼の本名も本当の顔もどれなのか全くわからなくなっていた。これは意図的なカモフラージュでありそれは成功していたの

だ。そして伝説が一人歩きもしていたのである。
それによってだ。彼の本名も正式な階級も素顔もわからなくなっていた。当然その職務もである。何もかもが不明になっていたのである。
だからだ。将軍も今こう言ったのであった。
「だからだ」
「私が黙っていればですね」
「それで済む。いいな」
「はい、それでは」
「君は裁判にかけられて刑務所に入るだろうが出られる」
こう言うのであった。
「安心するのだ」
「そしてそこから出た後は」
「君自身で考えるといい」
将軍もそこまでは言えなかった。流石にそれから先はわからなかったのだ。
「それはな」
「左様ですか」
「ではだ。また会おう」
将軍は彼と別れだ。左手に足を進めるのだった。
「機会があればな」
「はい、閣下も」
「うむ、これでな」
二人で敬礼をし合ってだ。そのうえで別れた。ハルトマンはこの直後連合軍に拘束された。だが彼の正体は知られておらずそのまま普通の軍人として裁判を受け判決が下った。懲役七年であった。
そこから出てだ。西ドイツに入った。しかし仕事は何をするか考えていなかった。だがここで彼の前にある国から使者が来たのであった。
「アルゼンチンのか」

「はい、アルゼンチン陸軍です」
スペイン語の訛りが見られるドイツ語での返答だった。
「その軍事顧問になって欲しいのですが」
「私がか」
「是非。大佐として来て頂けます」
「階級はいい」
それはいいというのだった。それはだ。
「だが。私をか」
「是非にです」
使者はこうまで言ってきた。
「我が軍を精強にする為です」
「その為に私を」
「新兵の教育、そして」
さらに言ってみせた。
「新たな士官達の為に」
「士官学校にもか」
「はい、真の軍人の育成を御願いします」
「真の軍人の育成」
それを聞いてであった。ハルトマンの目がふと変わってきた。そうしてだった。
暫し考えた。これまでのことをだ。そうしてであった。
「ドイツが敗れたのはだ」
「はい」
「我々が至らなかった」
こう言うのだった。

第九章

「政治家達に軍人の考えを伝えられず」
「そうしてですか」
「命令に従うだけでいいとした」
こうした軍人も確かにいた。だがマンシュタインの様にヒトラーの下まで言って直談判をしてそのうえで作戦を承認させた者もいる。グーデリアンもあくまで食い下がった。ルントシュテットも直言を憚らなかった。そうした軍人達もいたのだ。
「だがそれは誤りだった」
「それを正す為にもですか」
「軍人として正しい姿」
呟く様な言葉だった。
「その為にだ」
「来て頂けるのですね」
「喜んで」
こくりと頷いての言葉だった。
「それではだ」
「では。アルゼンチンへ」
こうして彼はアルゼンチン軍の顧問となった。このことが彼の運命を決定付けた。彼は実質的に不老不死でありそのうえで長きに渡って軍人として働き続けた。
千年後だ。銀河の時代になってだ。各国の軍人を務めてきた彼に対して今ある者から声をかけられた。その声はというとであった。
「連合軍が創設される」
「はい、中央軍がです」
「千年の間創設されていなかったがだ」
それでもだというのであった。
「しかしそれでもか」

「はい、今創設されることになりました」
「そうか」
「それで各国の軍がその中に組み入れられることになりました」
これは事実であった。各国の選挙でも決定された事実である。
「それですが」
「私もか」
「どうされますか？」
彼自身への言葉だった。
「それで」
「私が中央軍に入るか」
「階級は大佐です」
階級についても言及された。
「今の階級のそのままです」
「大佐か」
「何でしたら准将、いえ少将ではどうでしょうか」
提案された階級があがってもきた。
「お望みのままに」
「いや、階級はいい」
ハルトマンには出世欲やそういった欲はない。権力欲や権勢欲もである。そういった欲はないのである。これはサイボーグになる前からのことである。
「それはだ」
「いいのか」
「そうだ、いい」
階級にはこだわらないというのだった。
「それよりも私を招いてくれているのか」
「各国の全ての軍が統合されますが」
「その中でか」
「そうです、貴方もその中にいるのです」
「連合軍の軍人としてか」

「如何でしょうか」
使者に来ている者はスーツだった。端整なネクタイを見せてもいる。
「それで」
「わかった」
こくりと頷いたうえでの返答だった。
「それではだ」
「連合軍に来て頂けますか」
「うむ。そして私の職務は何だ」
「教育です」
それだというのだった。
「それです」
「そうか、教育か」
「それで如何でしょうか」
こう彼に問うのであった。
「駄目でしたら別の。参謀でも何でも」
「いや、それでいい」
それでだ。構わないというのであった。

第十章

「言われた役目を果たさせてもらう。だが」
「だが？」
「言わせてもらうことは言わせてもらう」
このことは言うのであった。しっかりとだ。
「それでいいな」
「それもわかりました」
使者はしっかりとした声で頷いてもきた。
「長官に伝えておきます」
「長官か」
「防衛省の長官です」
それだというのだった。
「その長官にお伝えします」
「その長官は誰だ」
「八条義統です」
その名前が今ここで言われたのだった。
「日本で防衛大臣を務めておられた方です」
「日本のか」
「御存知でしょうか」
「日本という国は知っていた」
懐かしむ言葉だった。彼がサイボーグになりたての頃だ。ドイツにいた頃だ。その頃のドイツの同盟国の一つだったのだ。まさにその国だった。
「あの国か」
「あの国の防衛大臣でしたが今は中央政府国防省の長官です」
「思えばそれも因果か」
ふとこうも言ったのであった。
「それもまた」

「因果とは」
それを聞いた使者の顔が怪訝なものになった。
「それは一体」
「あっ、いや」
使者の表情が変わったのを察してだ。ハルトマンは咄嗟に言葉を変えたのであった。そしてすぐにこう言い換えてきたのである。
「何でもない」
「そうなのですか」
「そうだ、何でもない」
「そうですか。それでは」
「連合軍か」
その名前にも記憶があった。とはいっても名前だけであった。
そしてだ。かつての己のことも言うのであった。
「ドイツは今は敵だな」
「はい、千年前から」
即ちエウロパが宇宙に出てからの対立である。もっと言えば宇宙進出時代からの非常に根の深い対立である。そしてハルトマンもまた、だ。
「私も今では連合の人間になったのだな」
「いえ、大佐は確かアルム生まれでは？」
今はシュメールにいる。だがそれでもアルム出身ということになっているのである。経歴はかなり改竄されているのである。少なくともドイツ出身ということにはなっていない。
「そうだったのでは？」
「そうだ」
そして彼もそのことにしたのだった。
「その通りだ」
「ではドイツもまた」
「そうだ、敵だ」
最早そうとしか思えなくなっていたのである。今ではだ。

「エウロパは敵だ」
「では。そのエウロパに勝てる様な軍を作り上げる為にも」
「この力役に立たさせてもらいたい」
こうして彼は連合軍に入った。鬼大佐誕生の瞬間であった。一つの恐ろしい話がここからはじまるのであった。

サイボーグ軍人　　完

２０１０・５・２１

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5531l/

サイボーグ軍人

2010年10月8日14時58分発行